

ボストン通信

勝又, 基
明星大学

<https://doi.org/10.15017/4742096>

出版情報 : 雅俗. 19, pp.126-128, 2020-07-15. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



ポストン通信

勝又基

いま米国にいる。ポストン近郊にあるブランドアイズ大学の、ドイツ、ロシア、アジア言語・文学学科という部署で客員教授を務めているのだ。

米国での長期滞在はこれが二度目になる。五年前にハーバード大学に在籍した際の肩書は客員研究員だった。これは同大学の豊富なリソースを利用できる代わりに、給料なし、具体的な義務なし、という極めて自由な立場だった。対して今回は客員教授という身分だ。有給の代わりに、授業を一年間で二つ受け持つ義務がある。これまで英語での学会発表は何度か行ってきたが、授業をすれば難度は段違いだ。我ながら、これはなかなかのチャレンジである。

まずは担当する二つの授業のテーマを何にするかだが、一つは井原西鶴にした。最大の理由は、テキストの制限である。日

本古典文学の翻訳は、驚くほど少ない。西鶴作品でもせいぜい半数程度だ。『西鶴諸国ばなし』『本朝二十不孝』『万の文反古』など、いずれも英訳がない。デイヴィッド・アサートン「アメリカ合衆国における西鶴研究」(『西鶴と浮世草子研究』五(二〇一一年、笠間書院))によれば、ある時期から英訳が研究者の業績としてカウントされなくなり、その結果、翻訳が途絶えたのだという。じつは当初の授業案では、太宰治『新釈諸国断』の十二の短編と、その素材となった西鶴の該当章とを比べさせようと考えていた。西鶴作品も幅広く学べるし、近代とのつながりをも学べると期待したからである。しかし先述の通り、半分以上の西鶴作には英訳がない。そればかりか、驚いたことに、太宰『新釈諸国断』もまだ英訳されておらず、断念する他なかった。ちなみに、日本文学の翻訳状況を知る

には、国際交流基金の「日本文学翻訳書誌検索」というウェブサイトが有用である。結局、近世文学二コマ分の英語テキストを揃えるのは無理だと判断し、もう一つの授業ではマンガを教えた。

ここ数十年の近世文学研究は、多様化の歴史だった。雅と俗、教訓と滑稽などをキーワードに、従来「文学」の埒外だった分野に光が当てられて来た。さらに新日本古典文学大系などによって注釈も備わり、授業でもその多様性を伝えることができ。かたや英語圏ではどうか。当地での研究の目的、対象、方法は、日本より多様化している。しかしながら、こと授業においては、その多様性を学生に伝えるテキストがない。わずかにスミエ・ジョーンズら編『江戸アンソロジー』および『上方アンソロジー』(ともにハワイ大学出版)を除けば、従来どおり芭蕉、西鶴、近松を教えざるを



得ないのである。古典文学を教える先生方は、手製の英訳テキストを用意していることも多いそうだ。

このような状況なので、おのずと日本学の授業では、英訳が豊富な近代文学、マンガ、映画などが多く取り上げられる。教えられなければ学生の興味は古典に向かない。したがって研究者の卵も減る。という悪循環である。古典文学の英訳不足問題は、われわれ日本の研究者にとっても無関心でいられるものではないだろう。

授業は週に二回、各八十分で全二十六回。中間レポートも課すので、通年の授業を半期で行うような密度である。その中で、こちらの学生は、噂に違わずよく勉強する。宿題の提出率も高く、授業中の議論も活発である。ただ、実際にこちらで教えてみて、この熱心さにも理由があることがわかった。まず、学生は半期に授業を四〜五種類しか取らないので勉強時間がある。加えて、学生が成績にとてもこだわる。高校時代から成績が進学に影響して来たし、大学での成績が奨学金などに直結するからである。

さて、西鶴の授業は「日本近世小説における欲望とモラル」と題することにした。

テキストはすべて英訳本を用い、『武家義理物語』『男色大鑑』『好色一代女』『日本永代蔵』『世間胸算用』から数話ずつ選んだ。加えて各章に関連する論文を一つずつ読ませた。もちろん西鶴の論文が何本もある訳ではないので、背景を学ぶために近世史の論文を読ませたこともあるし、英訳西鶴テキストに対する書評を読み比べさせたこともある。受講してくれた十三人の学生の専攻は言語学、哲学、生物学、コンピュータ・サイエンス、経済学と多彩で、日本語を学んでいる学生は約半数にとどまった。

受講生には毎回予習を課し、その証として、テキストの感想や議論したい点についての百語程度の作文を提出させた。授業では、まず数名のグループで話し合わせ、その上で、担当学生が今週の章段と論文についてパワーポイントで発表。筆者も用意してきたパワーポイントで発表し、議論して終わり、という流れである。

さまざまなバックグラウンドを持つ学生から本質的な疑問や意見が投げかけられるのは刺激的だった。しかしながら、英訳のみで読んでいる学生に語句レベルでの考証は期待できないため、授業のゴールを日本とは変える必要があった。また、学生た

ちは大掴みにするのが上手な代わりに、すぐ現代的な問題に結びつけて結論つけてしまうのはやや問題だな、と思った。そこで「西鶴のテキストをできるだけ多く読んで、そこから結論を導こう」ということは繰り返し訴えた。

英語で授業ができたのか？と問われれば、まあ、なんとかやった、と答えるしかない。今の英語力は、一方的に考えを話すだけならなんとかできる、という程度である。難題は聞き取りだ。四十代半ばからの英語再スタートだったので、耳の方はなかなか改善できない。TAや日本語を勉強している学生たちに助けられて、這々の体でこなしした。

そんな悪戦苦闘の授業において、最終的に頼りになったのは、江戸文学とマンガの知識、そして読みの力だったように思う。作品世界を豊かにする知識を授けることができ、学生の見方を変える細部の解説や読み筋が提示できれば、彼らは傾聴してくれ、英語も通じた。学生時代の演習や読書会で少しずつ積み重ねてきた読みの鍛錬が、心細い場所で私の杖となってくれたのである。そして若き日のマンガ乱読。福岡での大学院生時代には、修論・博論のスト

レスを抱えながら喫茶店へ毎日のように通って数時間を過ごし、執筆の合間にマンガ雑誌を読み漁っていたものだった。あの日々が、時を経てこんな形で役立ってくれるのだから、人生とは不思議なものである。

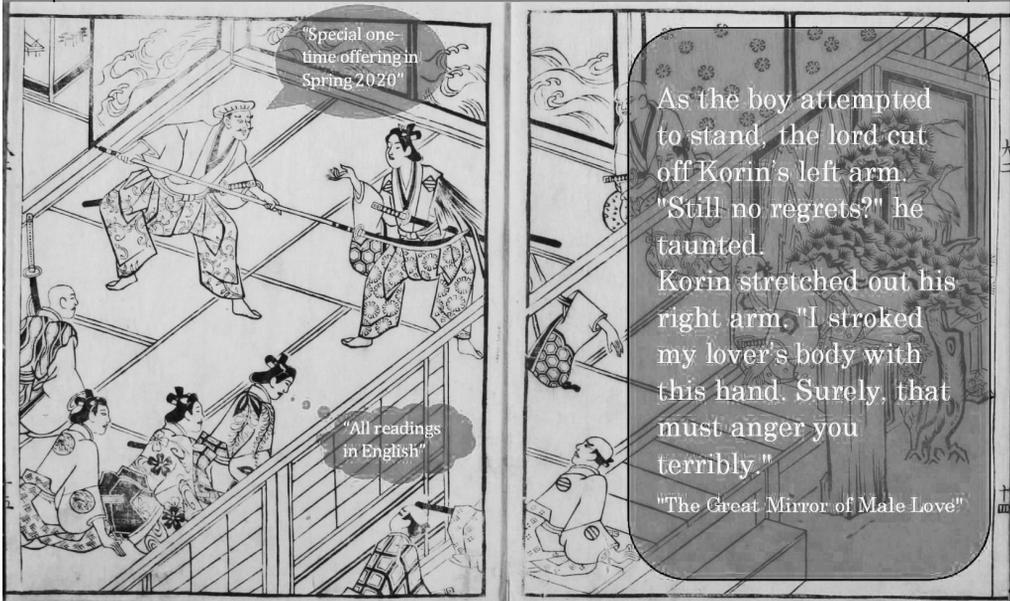
そして、西鶴の多彩かつ巧妙な作品の魅力に助けられた面も大きい。西鶴作品は、どの時代、どの地域、どの文化においても、読む人なりの疑問と想像力を喚起してくれる装置なのだと言認識させられた。

さて、この体験から日本に持ち帰れるものは何だろうか。個人的には、日本古典文学を教えることの意義を問い直す必要を感じた。いま目の前にいる学生が、なぜこれを読んで、教員として何を与えたいのか。この問いに自覚的になることを通じて、帰国後の自分自身の授業はおのずと変わってゆくことだろう。あとは日本でも今は宿題をたっぷり課す所存である。

Greed and Morality in Early Modern Japanese Novels

JAPN 150A | Professor Motoi Katsumata | T,F 12:30 PM-1:50 PM

This class examines the diverse short fiction of Ihara Saikaku, a seventeenth-century merchant writer from Osaka. Saikaku's novels and short stories insightfully and vividly explore such themes as homosexuality, vengeance, filial piety, jurisprudence, and the nouveau riche.



こちらでは授業のポスターを作って受講生を募集する。『男色大鑑』の名場面を英訳入りで用いた。